第２章　トータルパッケージの活用とホームワーク版の提案

第１節　トータルパッケージ及びホームワーク版の概要

１．職場適応促進のためのトータルパッケージの概要

障害者職業総合センター障害者支援部門では、精神障害者や高次脳機能障害を有する者に対する評価技法の開発を目的として、職業能力を評価するだけでなく、作業を行う上で必要となるスキルや職務遂行を可能とする環境（補完手段や補完行動、他者からの支援等を含む）を明らかにするため、事務作業やOA作業、実務作業からなるワークサンプル（幕張版）（Makuhari Work Sample；以下MWSという）の開発を行ってきた。また、高次脳機能障害者等への情報の整理方法の獲得を目的としたメモリーノート（幕張版）（Makuhari Memory Note；以下M-メモリーノートという）を開発した。さらに、職業リハビリテーションの指導・支援の中で生じるストレスや疲労に対するセルフマネージメントスキルの獲得を支援するため、幕張ストレス疲労アセスメントシート（Makuhari Stress Fatigue Assessment Sheet；以下 MSFAS という）を開発・試行するとともに、ストレス・疲労への対処行動の確立をめざした指導・支援の方法についても研究を行ってきた。

本稿では、これまで開発してきた様々な課題やツール、指導・支援方法等の総合的な活用方法である「職場適応促進のためのトータルパッケージ（以下、トータルパッケージという）」について紹介する。

図２－１　トータルパッケージの全容

トータルパッケージは、対象者が作業遂行力、対処行動、補完手段・補完行動を獲得し、個々の力に応じたセルフマネージメントスキルを身につけられるよう、また支援者が、個々に必要な指導・支援を総合的に提供することができるよう開発された方法である。総合的な職業リハビリテーションサービスであるトータルパッケージの全容を図２－１に、その内容と実施上のポイントを表２－１にまとめた。

ウィスコンシン・カードソーティングテスト（Wisconsin Card Sorting Test；以下WCSTという）は神経心理学的な検査の一つであり、遂行機能障害（思考や計画立案、計画遂行等の能力の障害）に関する検査として医療の分野で広く用いられている。トータルパッケージではこの検査を、補完手段等の必要性・有効性の推定を行えるよう工夫し、職業リハビリテーションサービスの一つとして活用している。

メモリーノートは記憶障害のある対象者に有効な補完手段として、よく用いられるものである。M-メモリーノートでは、情報整理の方法と活用に向けた支援を開発するとともに、記憶障害だけでなく、遂行機能障害や精神障害に対しても有効なツールとなるようシステム手帳形式の様式を用いることで、メモリーノートを職場に合わせた形へと進歩させた。オリジナルのシステム手帳様式と、それらを使いこなすための指導・支援方法を合わせて“M-メモリーノート”として整理している。

表２－１　トータルパッケージの構成と機能、実施上のポイント

	課題	機能	実施上のポイント
1	Wisconsin Card Sorting Test（WCST）	遂行機能障害等の有無の確認 効果的な支援方法の評価	・指導者は有効な補完手段・補完行動の手がかりを得られる。 ・対象者は補完手段・補完行動の有効性を体験する機会となる。
2	M-メモリーノート	基本的な情報整理スキルの獲得	・対象者は補完手段・補完行動の有効性を体験する機会となる。 ・スケジュールや行動の管理、行動記録、情報共有のツールとして、対象者のニーズに合わせて使用する。
3	MWS（簡易版）	課題の体験 作業における 障害の現れの確認 作業の実行可能性、作業耐性等の把握	・簡易版を体験し、興味のあるものや取り組みたいもの、苦手なものを特定する。 ・作業への障害の影響を予測する。
4	MWS（訓練版）	作業ミスや作業能率の改善 作業遂行の安定 補完手段の特定と使用の訓練 （難易度の段階的設定）	・原則として、本人との相談により決定する。 ・難しすぎる課題は除外し、できる課題から取り組み、段階的に訓練を進める。
5	MSFAS（ストレス・疲労のセルフマネージメント）	障害状況に関する情報の整理 障害理解・障害受容の状況等の把握 ストレスや疲労の現れ方等の把握 情報の収集・共有と支援計画の立案	・本人主体に作成し、相談の中で、ストレス/疲労のセルフマネージメントへの獲得に向けた支援を計画する。 ・ストレス/疲労セルフマネージメント訓練を段階的に実施する。
6	グループワーク	ピアモデルを見る機会の設定 障害認識に関する検討	・作業開始時、終了時等に情報交換や討議を行うグループ活動の機会を設定する。 ・M-メモリーノートの利用状況や作業状況等、リハビリテーションのポイントを確認する。

MWS には、簡易版と訓練版がある。簡易版は比較的短時間で 13 の作業課題を経験でき、対象者自身が自分に合った作業や興味のある作業を見つけたり、自分の障害が作業上どのような結果となって現れるのかを確認することができるよう作成されている。一方、訓練版は簡易版と同様の作業を用いて、各

作業に難易度別のレベルを設け、訓練に活用できるようボリュームを大きくし、評価や訓練に活用できるワークサンプルとして作成されている。これらを訓練課題として用いることで、補完手段・補完行動や個々に必要な環境整備を特定できるよう工夫している。

MSFAS は、ストレスや疲労に関連する情報を整理し、それを乗り越えていくための対処行動を計画的に学習する方法を検討するシートである。これは対象者自身が作成する様式と相談等で活用する様式に分かれており、対象者自身がストレスや疲労の中で見られる自分の障害の現れを見つめ直したり、相談の中で具体的な対処方法を見いだしていく際に用いることができる。さらに、MSFAS を用いて整理された疲労やストレスへの対処に関する課題について、セルフマネージメント訓練を行うことで、適切な対処行動の獲得を促すだけでなく、対象者自身の障害認識を高めることにもつながる（図２－２）。

グループワークは、トータルパッケージの実施期間中に行われる、朝・夕のミーティングを中心とした小集団での活動である。高次脳機能障害や精神障害といった中途障害者では、ひとりひとり個別での相談やカウンセリングだけでは、個々の障害を受け入れることが難しいと言われている。このような障害受容の問題を抱える障害者の場合、小集団の活動の中でお互いのことを話し合い、相互にモデルとなりながら障害について考えていく場が有効である。トータルパッケージでは、グループワークを重要な要素として考え、計画的に導入するだけでなく、その中でのやりとりを整理する方法を開発した。

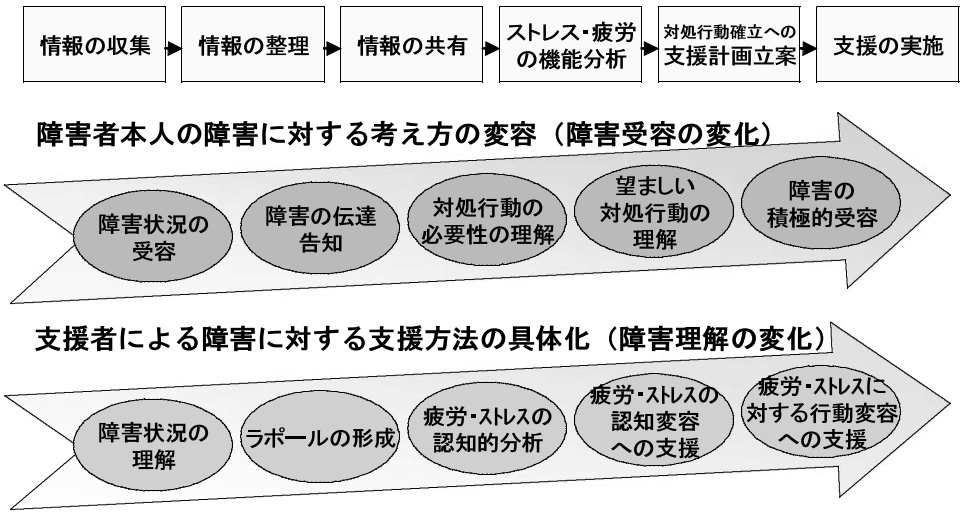

図２－２　MSFAS の活用の流れ

２．トータルパッケージの活用可能性の拡大

トータルパッケージは、多様化する職業リハビリテーション・サービスに対するニーズ（障害種別や支援内容等）に対応できるよう、また、複数の課題を抱える対象者に総合的な支援が提供できるよう工夫されている。相当のボリュームがあり、全てを活用するには、支援者にもある程度の努力と学習が求

められる。また、実施のための物理的環境を十分に整える必要もあるため、トータルパッケージの実施は職業リハビリテーション等の専門機関等が実施主体となることが想定されている。

一方、昨今では職業リハビリテーションの実施は、職業リハビリテーションの専門機関にとどまらず、医療・福祉・教育等の様々な現場での実施も必要とされてきている。そこで、トータルパッケージの活用を多くの障害種に拡大するとともに、様々な関係機関や家庭でも取り組みやすい MWS ホームワーク版（以下ホームワーク版という）の開発を行った。

３．ホームワーク版開発の目的

障害者の職業生活を支えるためには、事業所の理解や専門家によるサービスだけでなく、家族が継続的な支援を行える支援者としての機能を果たすことが必要である。

そこで本研究では、職業リハビリテーションにつながる支援技法としてトータルパッケージのホームワーク版の開発を行った。この開発では家事労働から職場での労働への段階的発展を指向しており、トータルパッケージを活用した職業リハビリテーションへの円滑な移行を支援することを目的としている。

４．ホームワーク版の概要

（1）ホームワーク版の開発コンセプト

ホームワーク版では、トータルパッケージの考え方に基づき、家事労働を課題分析し定型化し、負担感の低いレベルから作業体験できるようワークサンプルを作成している。このような家事労働のワークサンプルを活用することにより、家事労働に関する能力を段階的に学習することをねらっている。

また、ホームワーク版は、自宅での自学自習を可能とすることを目的としている。そのため、印刷物の指示書の他に、より具体的にわかりやすく各課題のすすめかたを解説したビデオを作成し、関係機関の職員や家族が支援者として取り組みやすくなるような環境整備を行っている。

関係機関や家族等は、トータルパッケージやホームワーク版に含まれる具体的なワークサンプルやツールの活用を通して、労働力としての本人の能力を客観的に把握できる機会を得るだけでなく、専門機関からのスーパーバイズを受けることで、関係機関や家族自らが職業リハビリテーションの支援者として機能する役割を学習できることを目指し開発した。

（2）MWS 及び MWS ホームワーク版の構成

MWS 及びホームワーク版の構成を表２－２に示す。MWS は事務・OA・実務に大別される 13 課題からなるワークサンプルである。ホームワーク版は、MWS と同様の 5 種類の OA 課題に、新たに開発された 6 種類の事務・実務課題を加えた 11 種類からなるワークサンプルである。全てのワークサンプルには、4-6 段階からなる難易度の異なる課題が整備されている。

MWS 及びホームワーク版の事務課題については、課題を実施するために必要な物品が整備されている。しかし、ホームワーク版の実務課題については、他の課題と異なり、家事労働の一部をワークサンプル化する方法について提案するためのビデオ教材のみを整備し、実際の作業に使う物品や詳細な実施方法は、個々の実施場面に応じて準備することとした。

なお、ホームワーク版の詳細な内容については、巻末資料を参照されたい。

表２－２　MWS 及び MWS ホームワーク版の構成

分類	HW 版	課題名	内容
事務	－	数値チェック	納品書にそって、請求書の誤りをチェックし、訂正する。
	－	物品請求書作成	指示された条件にそって、物品請求書を作成する。
	－	作業日報集計	指示された日時・人に関する作業日報を集計する。
	－	ラベル作成	ファイリング等に必要なラベルを作成する。
実務	－	ナプキン折り	折り方ビデオを見た後、ナプキンを同じ形に折る。
	－	ピッキング	指示された条件にそって、品物を揃える。
	－	重さ計測	指示された条件にそって、秤で品物の重さを計量する。
	－	プラグタップ組立	ドライバーを使い、プラグ、タップを組み立てる。
OA	共通	数値入力	画面に表示された数値を、表計算ワークシートに入力する。
	共通	文書入力	画面に表示された文章を、枠内に入力する。
	共通	コピー＆ペースト	画面に表示されたコピー元をコピー先の指定箇所に貼る。
	共通	検索修正	指示書にもとづき、データを検索し、訂正する。
	共通	ファイル整理	指示された内容にそって、ファイルを分類・整理する。
事務	○	宛名書き	課題用紙を参照し、解答用紙に手書きで宛名を書く。
	○	健康管理グラフ	家族 6 人の健康指標データを手書きでグラフ化する。
	○	家計簿作成	家族 6 人の 1 日毎の収支状況を計算する。
実務	○	洗濯物たたみ	洗濯物をたたみ、収納カゴの所定の位置にしまう。
	○	食器洗い	使用した食器をシンクに運び、洗う。
	○	包丁の使い方（野菜）	野菜を洗浄・皮むき・カットし、容器に収める。

（３）指示書・マニュアル・ビデオ教材

ホームワーク版の実施スタイルは、対象者が関係機関や家族等の支援を受けながら、家庭で自学自習の形で進めることを想定している。そのため、対象者と支援者（家族等）により実施～採点・評価までを行えるようにする必要があるため、各々の教材を「見易さ」や「誰にでも分かりやすい言葉遣い」を意識して作成した。

そのため、事務課題では、印刷物の指示書「課題のすすめかた」に加え、より具体的にわかりやす

く各課題のすすめかたを解説した「教示用ビデオ」を作成した。「教示用ビデオ」では、動画と音声の説明に加え、画面に説明文やキャプション（図２－３）を表示し、作業段階が明確になるよう工夫した。また、実務課題では課題の進め方の指示は、基本的に「教示用ビデオ」により行うこととし、各レベルの全ての作業について、作業指示のツールとなるビデオ教材を作成した。また、「食器洗い」「包丁の使い方（野菜）」には、準備や後片付けのビデオも作成した。ビデオには、音声による説明を加え、作業手続きの区切りには説明文の画面を入れ、作業の段階を理解しやすくなるよう工夫した。

また、OA 課題は、支援者や対象者が理解しやすい「マニュアル」を作成し、より作業方法を理解しやすくなるようにした。

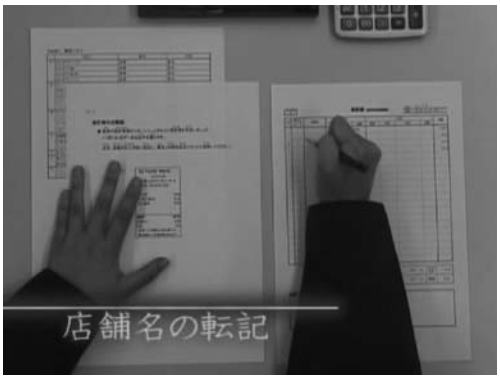

図２－３　教示用ビデオキャプション例
（家計簿作成より）

（４）支援技法の提案

支援者へは、ホームワーク版を活用する際の支援技法を提案することが必要だと思われる。その一つに、トータルパッケージの他の要素と合わせて実施する方法についての検討が考えられる。例えば、M-メモリーノートの一体的実施を通して、家庭内での日課を創り出し、規則的でリズムのある生活スタイルを形成することや、生活の状況や疲労度を自己点検したり、作業結果を自己評価することにより、セルフマネージメントの習慣化を図ることなどが、その例である。

また、このような家庭への支援技法の提案は、教育や福祉の現場でも活用できる指導・支援技法となると考えられる。また、ホームワーク版の対象者は、職業リハビリテーション・サービス待機者、生活リズムの改善が必要な者、家庭内自立を指向している者などを想定している。

５．第２節の構成

次の第 2 節は、トータルパッケージ及び MWS ホームワーク版の様々な関係機関での活用事例を通して、トータルパッケージの活用可能性や具体的な導入の仕方、活用方法等を理解することを主眼に、以下のように構成されている。

まず、第 2 節 1 では教育機関におけるトータルパッケージの活用事例を、続く第 2 節 2 では医療機関における活用事例をとりまとめた。また、第 2 節 3 では、福祉機関における活用事例として、精神障害者生活支援センターにおける活用事例と、知的障害者の小規模作業所での活用事例についてとりまとめた。さらに、第 2 節 4 では、職業リハビリテーション機関における活用事例について、地域障害者職業センターのアンケート調査と併せて導入事例についても紹介する。